

## 滋賀大学漕艇部を関西屈指の強豪へ復活させるための取り組み

これまでの指導体制の分析と今後の課題

### 緒方俊輔

Shunsuke Ogata

陵水艇友会 / 幹事

### 兵藤佳照

Yoshiteru Hyodo

陵水艇友会 / 事務局長

### 辻岡榮一

Shigekazu Tsujioka

陵水艇友会 / 会長

### 本谷晃一

Koichi Motoya

陵水艇友会 / 幹事

### 三嶋洋平

Yohei Mishima

陵水艇友会

### 竹村信克

Nobukatsu Takemura

陵水艇友会 / 関東支部幹事長

### 道上静香

Shizuka Michikami

滋賀大学経済学部 / 教授

滋賀大学漕艇部は1923年、前身の彦根高商開校と同じ年に学友会端艇部として創部され、2023年に100周年を迎えた。本学では、他の多くの国立大学と同様にスポーツ推薦などスポーツ競技力向上のための入試制度は実施されておらず、部員のほとんどが未経験者からのスタートとなる。しかし、キャンパスの至近に日本最大の湖である琵琶湖を擁するという恵まれた環境を活かしながら、黎明期から戦前・戦後にかけて輝かしい戦績がある（1927年関西高専漕艇大会フィックス優勝（固定シート艇）、1935年、1940年、1952年、1955年、1960年いずれも、関西選手権競漕大会（以下、「関西選手権」と略す）男子舵手付きフォア優勝）。

1956年に全日本大学ローイング選手権大会（以下、「インカレ」と略す）の男子エイトに初参戦以降、1977年には全日本新人ローイング選手権大会（以下、「全日本新人戦」と略す）男子エイト準優勝、1983年には、島根国民スポーツ大会（以下国体と略す）<sup>＊</sup>男子ナックルフォア優勝、1985年関西選手権男子エイト優勝、2005年にはインカレ男子ペアにて準優勝などがある。しかし、2008年以降、部員数が急激に減少し、一時は部の存続が危ぶまれた。この期間、現役学生と陵水艇友会（滋賀大学漕艇部OB・OG会の名称、以下、「OB会」と略す）の若手OBが献身的な部員獲得努力を行い、何とか部員を確保し、存続の危機は免れたものの低迷が続いた。

このような中、創部90周年をきっかけとして、2014年より外部からプロコーチを招聘して、古豪復活のための強化策に乗り出したが、現在においても、関西屈指の強豪に復活したとは言い難い状況にある。

＊）瀬田漕艇クラブとの混成クルー

## Ⅱ 目的

本論では、主に、1978年～2019年までの41年間の滋賀大学漕艇部の部活動運営のあり方や外部コーチを含めた指導体制・方法などについて振り返り、優れた競技戦績を有していた時期と低迷していた時期を詳細に比較検討することにより、滋賀大学漕艇部が関西屈指の強豪校に復活するための今後の目指すべき方向性と課題について明らかにすることを目的とした。

## Ⅲ 方法

### 1 文献調査

1978年～2013年の取り組みについては、『『偲湖』陵水艇友会85年誌』<sup>3)</sup>、『『偲湖』陵水艇友会

90年誌』<sup>4)</sup>、『『偲湖』陵水艇友会95年誌』<sup>5)</sup>に基づき、詳細に振り返り作業を実施した。

### 2 ヒアリング調査

滋賀大学漕艇部創部95周年記念事業実行委員会のメンバー他6名を中心に、過渡期と思われる時代にかかわったOB他に対しヒアリング調査を実施し、部活動運営のあり方や指導体制・方法・指導内容・学生の部活動への取り組みの5項目を中心に詳細に振り返り作業を実施してもらった。また、ヒアリング調査を進める過程で、今後の課題などについても意見を述べてもらった。

### 3 アンケート調査

2019年7月において、OB会の全会員544名に対して、独自に作成したアンケート調査を実施した

#### 艇友会会員各位 【アンケートのお願い】

#### 創部 95 周年記念事業実行委員会

##### <要旨>

艇友会会員の皆様には、日頃から現役並びに陵水艇友会活動にご支援を賜り、誠にありがとうございます。本年 10 月、創部 95 周年記念式典を開催するに当たり、95 周年実行委員会として、来る 100 周年そしてその先に向けての艇友会の方向性について、種々議論を重ねました。大学や現役を取り巻く環境の変化などから、現役支援のあり方も、中長期的な取組が必要となっております。係る観点から、方向性についてより多くの会員の皆様の意見をお聞きして、今後の艇友会活動の指針として、実行委員会として艇友会本部に提案したいと考えております。以下の 5 項目の提案としてまとめましたので、忌憚のないご意見ご要望を賜りたく、ご多用中とは存じますが、本趣旨をご理解いただきまして、添付アンケート用紙にてご回答をお寄せいただけますようお願い申し上げます。回答は 7 月 10 日までを目処に投函（返信）をお願い致します。

##### ◎提案項目

##### 1. OB による継続的なサポート体制

学生気質の変化や現役の現状を鑑み、現役の自主性を尊重し、「教える」よりじっくり「育てる」ことを主眼とした、継続的且つきめ細かい、OB によるサポート体制の構築を目指す。

##### 2. 産根本部 設置

陵水会同様、艇友会の本部を産根に設置する。滋賀県在住者の増加もあり、現役の見守り役、身近な相談相手であり、大学・地元との連携・折衝等の機能も担う。

##### 3. 艇庫・合宿所建替え問題への取組

中長期的最大の課題である艇庫・合宿所建替え問題に対し、学校、県・市を巻き込む構想の練り上げなど継続的に行うための体制を整える。

##### 4. 永続的で強く透明性のある組織運営への取組

多くの関係者への協力や資金提出の要請を行うための透明性のある組織作り、運営を展望する中で、一般社団法人、特定非営利活動法人（NPO 法人）の資格取得検討も視野に入れる。

##### 5. 現役と陵水艇友会の基本理念とビジョンの再確認

OB によるきめ細かいサポート体制は必要だが、『OB は金を出すのが口は出さない』良き伝統を守りつつ、大学、地域とともに永続的に発展するという現役・OB 共通の理念とビジョンを持つ。

図1 創部95周年事業実行委員会によるアンケート調査項目（一部抜粋）

(図1)。その内容は、①OBによる継続的なサポート体制、②彦根本部設置、③艇庫・合宿所建替え問題への取り組み、④永続的で強く透明性のある組織運営への取り組み、⑤現役と陵水艇友会の基本理念とビジョンの再確認の5項目について提案し、会員に対し共感の度合いについて5段階のレベル調査と自由記述にて意見集約し、『『偲湖』陵水艇友会95年誌<sup>5)</sup>』に寄稿したものを活用した。なお、ヒアリング及びアンケート調査については、個人に不利益が生じないように、十分に配慮した上で実施した。

## 4 調査項目

上述した文献、ヒアリングおよびアンケート調査に基づいて、卒業年次別部員数、年間競技戦績、部活動運営、外部コーチの有無、指導体制・方法などについて調査した。

年間競技戦績は、以下の方法でスコア化した。

滋賀大学漕艇部が例年戦績目標として重要視して来た大会を

①全国規模の大会として戸田オリンピックコースで開催される、全日本ローイング選手権大会(現在は海の森公園にて開催)・インカレ・全日本軽量級選手権・全日本新人戦(いずれも2000mレース)並びに国体(県予選あり1000mレース)を全日本クラス大会、

②大規模な地方大会である朝日レガッタ・中日本レガッタ(共に1000mレース)・関西選手権(2000mレース)を主要大会、

③それ以外の大会をその他の大会に三分類し、各大会の得点配分を全日本クラス大会(1位:10点、2位:8点、3位:6点、4位:4点、順位決定:3点)、主要大会(1位:5点、2位:3点、3位:2点、4位以下順位決定:1点)、その他の大会(1位:3点、2位:2点、3位:1点)と定め、それらの合計点で算出した。

## 5 調査区分

卒業年次別部員数と年間競技戦績については、『偲湖』陵水艇友会95年誌<sup>5)</sup>を参考に、1924年～2018年の過去94年間を調査対象とした。また、インカレトップクルーと滋賀大学クルーとのベストタイム差については、月刊漕艇<sup>6)</sup>、月刊ローイング<sup>7)</sup>と日本ローイング協会ホームページ<sup>8)</sup>を参考に、1978年～2019年の41年間を調査対象とした。

部活動運営のあり方や指導体制・方法などについて、優れた競技戦績を有していた時期は、1982年～1987年を第一期黄金期、2000～2006年を第二期黄金期とした。低迷していた時期は、1988年～1999年をOBコーチによる下支え期、2007年～2013年を廃部危機脱出期、それ以降の2014年～2019年を再構築期として、5期に分けて調査を実施し、詳細に振り返り作業を実施した。

## IV 結果及び考察

### 1. 過去94年間における滋賀大学漕艇部の卒業年次別部員数と年間競技戦績の推移

図1は、過去94年間における滋賀大学漕艇部の卒業年次別部員数と年間競技戦績の推移を示したものである。卒業年次別部員数の推移をみると、1946年、1947年、1951年の部員数0を除けば、創部～1970年頃までは平均6名程度であった。1970年以降の卒業年次別部員数は徐々に増加し、1986年には19名に達したが、その後は徐々に減少し、特に2008年～2013年の6年間は激減した。しかしながら、再び卒業年次別部員数は増加し、2014年は過去最高の20名となった。

年間競技戦績の推移をみると、1975年頃から卒業年次別部員数の増加と連動する形で、徐々に年間競技戦績も右肩上がりとなり、1984年には21点の高スコアを示した。この時期の主な競技戦績に

については、1975年の朝日レガッタ男子エイト準優勝、1977年全日本新人戦男子エイト準優勝、1983年の国体男子ナックルフォア優勝、1985年の関西選手権男子エイト優勝などが挙げられる。その後、競技戦績は低迷するものの1997年頃から再び右肩上がりとなり、2001年には早くもインカレ男子エイト8位、女子シングルスカル4位入賞を、2005年にはインカレ男子ペア準優勝を果たすなど、この年は29点の最高スコアを示した。しかし、2009年以降、部員数の減少とともに競技戦績は低迷し、近年においては部員数が比較的多いにも関わらず、競技戦績については低迷した状態であることがわかる。

漕艇競技は9人乗りのエイト（漕艇競技の花形であり最も競技レベルが高く、部活動の総合力が試される）、5人乗りの舵手付きフォア（近年大学漕艇部部員の減少に伴い地方大学が目指すエイトの次の種目）に代表される大艇種目と、2人乗りのペア（技術的な要素が高い）、1人乗りのシング

ルスカル（技術的な要素に加え精神的な強靱さが求められる）に代表される小艇種目に大きく分かれ、対応する技術的な違いがあるため、以下では使い分けて使用することとする。

漕艇競技におけるレース種目は下表の通り。

表1：漕艇競技におけるレース種目

記号	種目	オールの種類※	乗員数	女子種目の有無
1 x	シングルスカル	スカル	1名	○
2 x	ダブルスカル	スカル	2名	○
2-	ペア	スweep	2名	○
2+	舵手付きペア	スweep	3名	
4 x	クォドルプル	スカル	4名	○
4-	フォア	スweep	4名	
4+	舵手付きフォア	スweep	5名	○
4 x+	舵手付きクォドルプル	スカル	5名	○
8+	エイト	スweep	9名	○
K F	ナックルフォア※※	スweep	5名	○

※スカル：二本漕ぎ                      スweep：一本漕ぎ  
※※ナックルフォア：四人漕ぎ、舵手付きの規格艇。漕艇競技普及のために考案された日本独特の艇。

上の表は、日本ローイング協会「競漕規則・細則-2024年4月版-」から抜粋し、必要と思われる項目を執筆者が追記した。

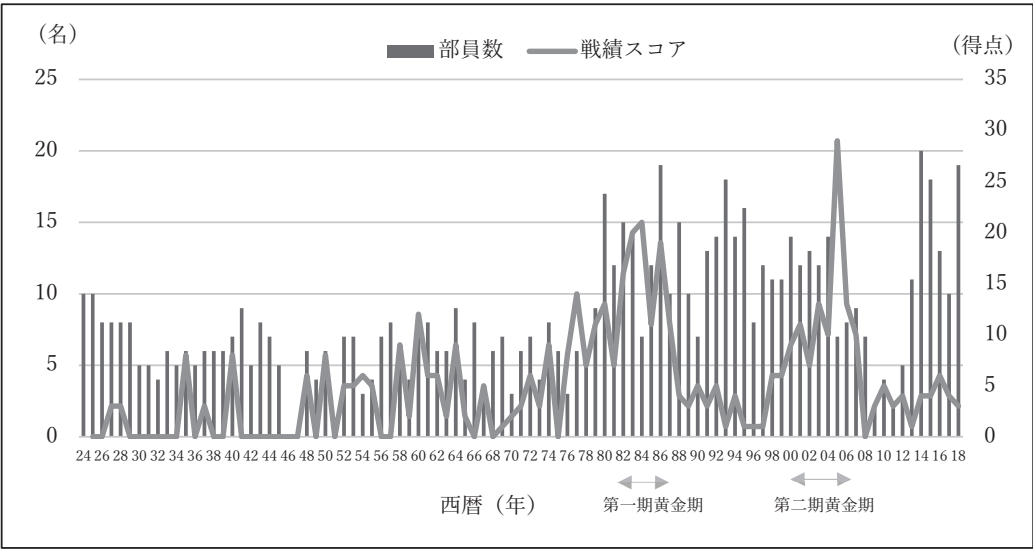


図2 過去94年間における滋賀大学漕艇部の卒業年次別部員数と年間競技戦績の推移



2. 過去41年間のインカレトップクルーと滋賀大学クルーとのベストタイム差

図2は、過去41年間のインカレトップクルーと滋賀大学クルーとのベストタイム差を示したものである。これをみると、男子エイトにおけるトップクルーとのタイム差では、1978年は全日本新人戦2位の主力メンバーの大半が残り、トップとのタイム差13秒と善戦している。また、1982年古川宗寿(以下、古川氏 故人：東レボート部出身、元ソウル五輪日本代表コーチ) コーチ時代の一年目で13秒差、1985年関西選手権男子エイト優勝クルーが19秒差、1986年は前年の主力メンバーが残り11秒差に迫っている。その後OBコーチ陣を編成した下支え期の1993年にも12秒差と善戦していることがわかる。

3. 各年代における部活動運営及び指導体制・方法の特徴

表2は、滋賀大学漕艇部の各年代における指導体制・方法について、簡潔にまとめたものである。以下、年代ごとに詳細に振り返り、記述することとする。

3.1 外部コーチ招聘以前(1978年～1981年)

古川氏がコーチとして就任する以前の滋賀大学漕艇部の特徴としては、国立大学二期校ということもあり、入学者の多くが進学校出身である程度の学力はあるが、第一希望が叶わず、漕艇部入部者はインカレ男子エイト優勝を目標に、受験での失敗をボートで取り返す気概に溢れていた。

1978年は、図2に示すように、部員数は比較的多く、全日本新人戦男子エイト準優勝のクルー(日本ローイング協会による日本代表選抜候補選手3名を選出している) が上回生に残るなど、戦力も充実していた。

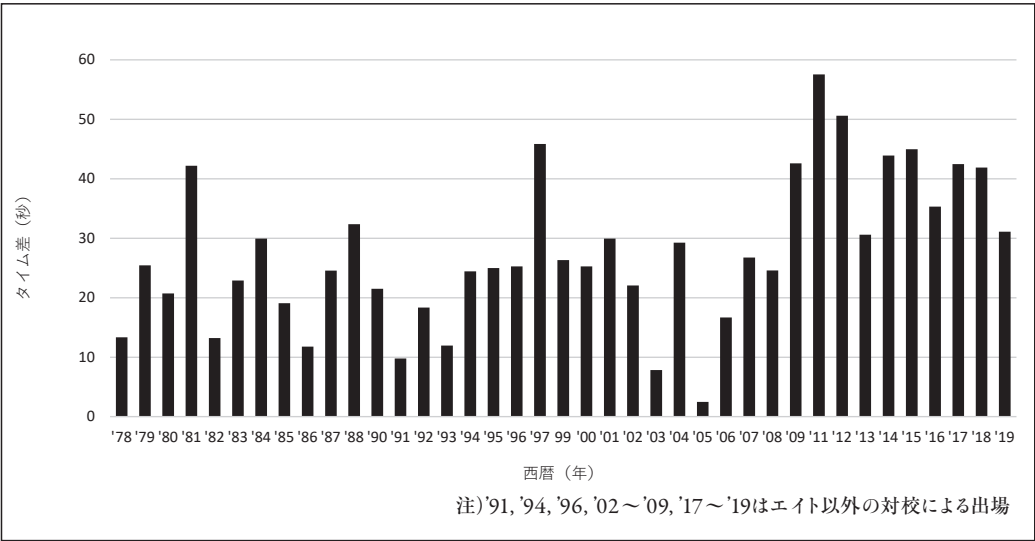


図3 過去41年間のインカレトップクルーと滋賀大学クルーとのベストタイム差

表2 滋賀大学漕艇部の各年代における指導体制・方法(1978年～2019年)

NO.	比較区分 ／項目	古川コーチ招来以前	第一期黄金期 (古川コーチ時代)	OBコーチ下支え期	第二期黄金期 (八木コーチ時代)	高部危機脱出期	再構築期 (野村コーチ時代)
I.	期間	1978年～1981年	1982年～1987年	1988年～1999年	2000年～2006年	2007年～2013年	2014年～2019年
II.	部活動運営の在り方	学生の自主性を尊重	当初は古川コーチの指導をそのまま、後半は学生の自主性を尊重	学生の自主性を尊重 OB故学生との距離感に難	学生の自主性を尊重	学生の自主性を尊重	漕艇競技に関する指導は野村コーチ、生活面や精神面に関する指導は故井上監督
III.	指導体制	監督が試合の都度総評 OBコーチ一名	古川コーチに全面的に委任	古川コーチの指導を受けた 1～5名のOBコーチが指導	八木コーチ1名で指導	会長または監督 OBコーチ一名	当初は監督、OBコーチも参画しての体制、その後故井上監督と野村コーチの2名体制
IV.	指導方法	監督が試合後の総会等総評 OBコーチ時折指導	古川コーチが週1～2回程度指導、時に古川コーチが学生と一緒に漕ぐことも	OBコーチが週1～2回程度指導 (OBコーチによるレース参加)	八木コーチが週1回程度指導	会長または監督、OBコーチが時折指導	監督と野村コーチが月1回2泊3日で指導
V.	指導内容	OBコーチの経験と理論、他大学の情報を参考に指導 学生が裏の練習方法や月刊漕艇を参考に練習方法を試行錯誤 他大学との情報交換	古川コーチの経験と理論に基づき指導 厚達厚則に依り、当時最先端の漕艇競技理論に基づき指導 学生時代にエイトを漕ぐことの意義をつたえる	古川コーチの指導やFISAのコーチングマニュアル・コーチ研修会に知識を参考に指導 OBコーチオラジナルは問わず	八木コーチの知識と経験に基づき指導 リボングの基本から懇切丁寧な指導、勝ち負けをつける、小艇によるシートレース、独島の理論による漕艇の徹底指導	自分たちの経験に基づき指導	野村コーチの知識と経験に基づき指導 フィジカルトレーナーもつき、当時日本で常勝の理論により指導 ボート経験者を集中指導
VI.	学生の部活動への取組み	二所校故ボートで日本一になる気概 ボートに学生生活の大半をストイックに費やす	勝つことを渴望 ボートに学生生活の大半をストイックに費やす	勝つことを渴望 ボートに学生生活の大半をストイックに費やす	勝つことを渴望 ボートに学生生活の大半をストイックに費やす	勝つことを渴望 ボートに学生生活の大半をストイックに費やす	楽しくボートに取り組み同好会的な雰囲気でも部員確保 勝ちたいものと楽しみたものに二重化

レースの都度開催されるOB会による慰労会で監督・OBから叱咤激励を受け、OBコーチはたまた来て指導する程度で、学生の自主運営に委ねられた。練習方法は東レとの合同練習で得た練習方法を取り入れるなど、試行錯誤の取り組みが続いていた。この当時は、筑波大学がインカレ男子エイト3位と好戦績を上げた筑波漕法(長いレールでキャッチから上体を飛ばす、脚が短く胴体が長い日本人に適した漕法)が流行しており、滋賀大学漕艇部もOBコーチのもとで、筑波漕法のエッセンスを取り入れた。

1981年からはOBコーチが不在となり、完全な学生主体の部活動運営がなされるようになると、前年までの筑波漕法から関東のクルーのように脚ドライブを効かせたオーソドックスな漕法を見様見真似で取り入れるようになった。しかし、戦力面の落ち込みが甚だしい中、キャッチからの水の捉え方がうまくいかず艇速が落ちるといった、いわゆる“漕ぎ急ぎ”が生じるようになり、冬期の猛練習の甲斐もなく春先から惨敗が続いた。

この当時の練習・トレーニング内容は、学生自らが『月刊漕艇』などを読みながら、なんとか計画

を立てて練習に励むといった試行錯誤の取り組みが続いていた。「勝ちたい」という強い意欲を持ち、高い目標を掲げる一方で、実際の練習計画や行動がそれに見合わないことが多かった。また、幹部が交代すると、専門知識の不足故良いとされていた練習方法やトレーニングのメニューが戦績次第で大幅に変更され、結果としてノウハウの蓄積が困難な状況に陥っていた。

このような一貫性に欠ける漕法への考え方や部活動運営のあり方、また、部活動全体において、原理原則を手探りしながら試行錯誤するものの、学生主体が故の勝敗を精神面の弱さに原因を求める傾向にあった。1982年より現役学生の要請を受けOB会は現状を打破させるきっかけとして、かねてから交流のあった古川氏を招聘し指導を仰ぐこととなった。

### 3.2 第一期黄金期(1982年～1987年)

1982年～1985年の4年間は、滋賀大学漕艇部では初の本格的な外部コーチとなる、古川氏を招聘し、直接指導を受けた時期である(写真)。古川氏の指導は、1981年9月から1985年の関西選手

権男子エイト優勝後、日本代表コーチに就任されるまでの約5年間であった。この間の主な競技戦績は、1983年の国体男子ナックルフォア優勝、関西選手権男子舵手付きフォア優勝や1985年の関西選手権男子エイト優勝などが挙げられる。その後、1987年まで古川氏に指導を受けたメンバーが残り、1986年オックスフォード楳レガッタ5位入賞他高い競技成績を維持していることから、1987年までを第一期黄金期としている。

#### <古川氏招聘の経緯>

古川氏は、1980年に関西オアズマンクラブを発足させ、東レポート部と関西の大学漕艇部との勉強会を冬期のオフシーズンに毎月開催していた。滋賀大学漕艇部も漕艇競技に関する技術・生理学的な専門的知識の獲得と他大学の情報入手や交流を目的に参加していた。この時、講師を担当していた古川氏の漕艇競技に関連する専門的知識の豊富さや熱意を目の当たりにし、また、その当時は現役選手であり、男子舵手付きフォア国体優勝や全日本ローイング選手権連覇を果たすなど、優れた競技実績を有していたことや1975年の朝日レガッタで滋賀大学漕艇部が男子エイトで準優勝

した際、短い期間コーチを引き受けており、すでにOB会との交流があったことなど、複数の要因が重なって滋賀大学漕艇部のコーチ招聘に至った。

#### <古川氏の指導体制・方法>

図4は、古川氏が学生に漕法の基本を説明した際の資料の一例である。艇速を上げるにはどうすべきか、その原理原則が詳細に記載されている。基本技術の構成要素、コーチングのポイント、目の付け所などについても、文字とイラストを使いながら、詳細に記載されており、学生に基本技術の重要性を視覚的に理解させながら指導にあたっていた様子が窺える。当時の滋賀大学漕艇部の漕



写真 国体に向けた練習風景(左から2番目が古川宗寿氏)

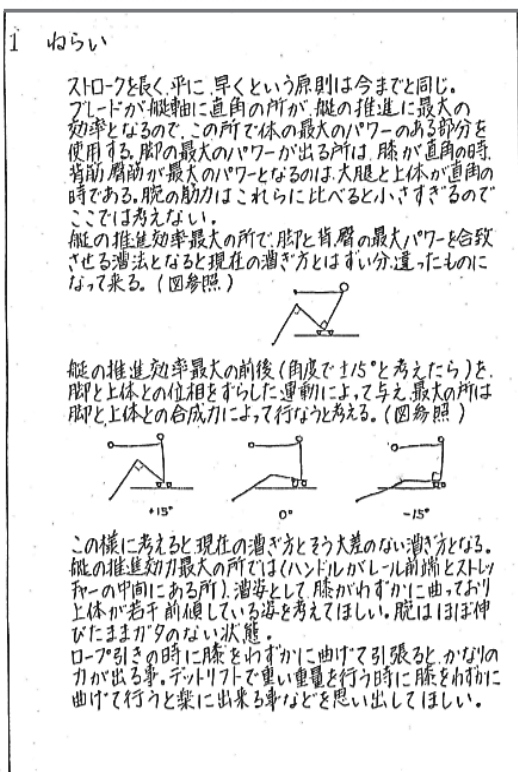


図4 古川氏が学生に漕法の基本を説明した資料の一例

法は、上述したように「キャッチが浅いことが問題であったため、古川氏自身が学生と一緒に漕ぎながら、連続写真を撮り、問題となっている動きや技術を見せながら漕ぎ方の技術指導もしていた。定期的に、ローイング・エルゴメーター（図5 新日本産業・Gamu大型）を使用して、身体能力の総合的資料を得て、漕力チェックやトレーニング処方の作成に役立てるなどの客観的データ活用の取り組みも導入されていた<sup>1,2)</sup>。

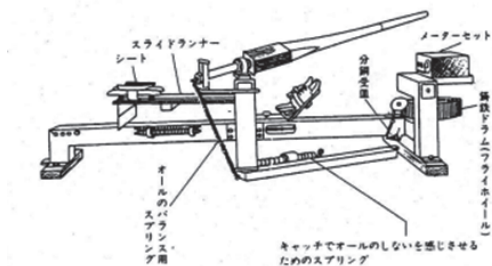


図5 ローイング・エルゴメーターの外観

このように、古川氏は、未経験者の多い現役部員に対して、理論的かつ視覚的・客観的なデータに基づく科学的なアプローチを重視した指導を行っていたといえる。また、古川氏は現役学生と混成クルーを組んで島根国体男子ナックルフォアで優勝等、教えるのが難しいとされる「勝ちへの執着心」というものや、「勝ち癖」の大切さといった精神面においても指導にあたっていたことは特筆すべき事柄といえる<sup>5)</sup>。ボートで勝つためには、日常生活からデメリットなことは排除することや、食事・睡眠・オフの過ごし方などにおいてもボート優先の行動をとる習慣づけをすることなど、日常生活を律することまで指導されていた<sup>5)</sup>。このような古川氏の持つ実践知を通じた指導は、当時の部員には、大変に強烈な取り組みであり、心技体戦術のあらゆる側面において、本学漕艇部の競技力向上

に大きく役立ったものといえる。前述の漕法の基本冊子に書かれた内容は、漕艇競技の原理原則を平易に説明したものである(図4)。古川氏以前にはそのような資料の継承はなく、古川氏はとにかくわかりやすい内容を、学生が腹落するまで繰り返し指導したこと、何よりどん底にあった部員が藁をもすがる思いで古川氏の指導を信じて練習に取り組んだこと、当時、ひたすら自分の限界に挑戦するストイックな練習が代々受け継がれて来たことが短期間に復活を果たした要因といえる。

図6は、古川氏の作成した1982年8月の練習計画表の一例である。これをみると、8月末に開催されるインカレに向け、明確な目標設定とトレーニング計画・手段が詳細に記載されていることがわかる。例えば、トレーニング目標については、当時、関西には2000mのレースはなく（関西選手権も当時は1500mのレース）、2000mレースに勝つための具体的な戦略として、後半を漕ぎ切るためのスプリント・集中力の養成、基本練習、熱中症対策、休日の取り方などを重視していたことがわかる。また、漕艇競技はチーム戦であるが、個別目標と全体目標についても具体的に記載されており、部員が視覚的に理解できる形で提示されていたことがわかる。これまでの試行錯誤の取り組みから、明確な目標設定に基づく練習計画・手段を認識した上で練習が遂行されるようになると、その練習の質が高まり、技術の改善・向上にともなって、艇速に結びつくようになった<sup>4)</sup>。さらに、古川氏の職場が瀬田川近郊であったことも幸いし、土日の練習に加え、平日の早朝練習（当時は大津市御殿ヶ浜で常時合宿）でも指導を受けられた。その練習量においても学生は与えられたメニューをすべて実施する気概と現に完遂し、学生主体で運営されていた時に比べ、漕破距離は約2倍に増えた。すなわち、古川氏により明確な目標設定に基づく指



5. Race 前の休日は移動日とし、セリウ限り1週間以上以前、24日繰り上げ  
(丁度1週間前日の夜半以降) 6. スタート時間 (SR) は1週間以上の短期間を延  
(セリウ限り 繰り前の前日)

Summer / July 2024 / No.440



これらの練習・トレーニングメニューはコーチ・部員間において共通認識の下で遂行されていたこと、5) 古川氏の環境的要因もプラスの影響を及ぼし、練習の量・質ともに向上したこと、6) 現役と一緒に艇を漕ぎながら、自身の技術や勝ちにこだわる姿勢を惜しみなく披露してくれたことや、日常生活のあり方までも含めたきめ細かな指導が提供されていたことなどが、滋賀大学漕艇部の思考・行動を漕艇競技の原理原則に沿って努力を積み重ねる方向へと変容させ、この年代の年間競技戦績に繋がったものとする。また、古川氏は、学生の自主性と個の成長を促すような指導方法の重要性を再認識させてくれたことや、学生時代にエイトを漕ぐことの重要性を説くなど、滋賀大学漕艇部に計り知れない影響をもたらしており、これらのことは、現在においても、古川氏の指導を受けたOBコーチによって受け継がれている。

### 3.3 OBコーチによる下支え期(1988年～1999年)

1988年～1999年の11年間(OBコーチによる下支え期)は、古川氏に指導を受けた5名のOBコーチ団が編成され、現役部員の指導にあたった時期である。この間の主な競技戦績は、1988年朝日レガッタ男子エイト4位、1990年関西選手権男子舵手付きフォア3位、瀬田川杯男子エイト優勝、1998年中日本レガッタ男子エイト優勝を果たすなど一定の競技戦績を残した。インカレにおいてもトップクルーとのタイム差をみると、1991年では10秒差(舵手付きフォアで出場)、1993年では12秒差であり(図3)、関東の大学クルーに果敢に挑戦し善戦したことが窺えるが、第一期黄金期のようなインカレでトップクルーと互角に競り合えるレースには至らなかった。なお、1996年～1999年の取り組みについては、OBコーチ団に指導を受けた村田氏(42期)がOBコーチとして現役部員を指導

したが、その後、村田氏の東京転勤に伴いOBコーチによる指導体制は一旦、途絶える状況となった。

### <OBコーチの指導体制・方法>

OBコーチ団は、古川氏から学生時代に直接指導を受けたもので、関西在住のメンバーから編成された。年齢は、20歳台後半から30歳台前半と若く、自らもボートを漕ぎたいという思いがあり、現役の指導だけでモチベーションを維持することが難しいため、レースに出場するための練習を兼ねて、土日に集まり、現役の指導にあたった。指導内容は、古川氏から受け継いだものが中心で、その他にはFISA(国際ボート連盟、現WORLD ROWING)のコーチマニュアルと全日本クルーのビデオを参考にしながらの取り組みとなった。平日は学生の自主性に委ね、練習メニューも学生が作成し、OBコーチ団は週1～2回程度、現役の指導を行った。この当時の学生は、OBコーチ団の指導を素直に受け入れ、先輩をリスペクトするといった昔ながらの雰囲気が残っていた。上述の通り、OBコーチ団は現役世代に近いこともあり、また、一緒に乗艇することもあったことから、このことは若手で編成されたOBコーチ団の良き側面であったといえる。

しかしながら、若手であるが故に学生との距離感があまりにも近すぎて、学生に対して勝負へのプレッシャーを与える一方で、OBコーチ団もまた、短期的な結果に一喜一憂し、長期的な視点での課題の検証・改善を図る取り組みがなされていない状況が続いた。それゆえ、指導する側が短期目標を追うことで疲弊してしまうという結果を招いた。上述の古川氏のような学生を圧倒するほどの漕艇競技に関する専門的知識や経験がなかったため、学生を指導する上で、こうすれば必ず勝るといった経験からくる絶対的な自信も身につけていな

かった。また、先輩であるが故に説明を尽くすことの不足や自身の経験に依存したコーチングに終始するなど、漕艇競技やコーチングに対する勉強不足も相まって、きめ細かな指導や練習メニューなどを学生に提供するまでには至らず、結局のところ学生の自主性に委ねた部活動運営となった。OBコーチ団と現役部員間において、練習・トレーニングの目標・計画・内容などが妥当であったか否かについての記録も残っておらず、その検証が不十分であったため、部活動運営をより良い方向へと軌道修正することができなかった。

加えて、OBコーチの全員が、確たる地位を築いていない若い年代のサラリーマンであり、現役を指導する環境を確保することが精一杯であったため、次第に仕事とコーチ業を両立することが難しくなっていた。

#### <OBコーチによる下支え期のまとめ>

OBコーチの指導体制・方法は、古川氏のように学生に大きな刺激を与えられるほどのものではなく、学生の部活動運営に対して、漕艇技術に関する知識も現役との適度な距離感も保てないまま中途半端な関わり方であったことがこの時期の大きな問題点の1つであった。それでも自らの限界にひたすら挑戦し真摯に漕艇競技に取り組む姿勢が受け継がれていたことはOBコーチとして最低限の役割を果たせたといえる。決して満足な戦績は収められなかったものの、その代で最善の努力をし、インカレで勝つためにエイトをあきらめ舵手付きフォアで出場するなど、勝負に対して貪欲に取り組んでおり、第二期黄金期につながる重要な役割を果たしていたものといえる<sup>5)</sup>。

### 3.4 第二期黄金期(2000年～2006年)

2000年～2006年の7年間(第二期黄金期)は、滋賀大学漕艇部では2人目の外部コーチとなる八木千尋氏(現 京都府立海洋高校教諭、日本ローイング協会近畿ブロック強化オフィサー；日本体育大学ボート部出身、インカレ男子舵手付きフォア優勝)を招聘した時期である。この間の主な競技戦績は、2001年にはインカレ男子エイト8位、女子シングルスカル4位入賞を、2005年にはインカレ男子ペア準優勝などが挙げられる。

#### <八木氏招聘の経緯>

八木氏は、学生時代には全日本ローイング選手権男子舵手無しくオドルプル、インカレ男子舵手付きフォア、男子ペアなど全日本タイトルを複数獲得しており、所謂「勝ち癖」を持っている人物であった。また、当時の滋賀大学漕艇部に必要であった客観的な視点からのアドバイスや技術面での指導、上述のような「勝ち癖」を学生に伝えることのできる稀有な人材であった<sup>5)</sup>。人柄については、ボート好きであり、ボートのためなら時間を惜しむことなく自身の持つエネルギーと情熱をボートに注ぎ込むという熱意溢れる人物であり、その点で、古川氏と多くの共通点があった。このような漕艇競技において貴重な人物と奇跡的な出会いが訪れる。

八木氏が東京勤務時代にOBコーチをしていた村田氏(42期)も東京勤務となり、週末戸田でボートを一緒に漕ぐ間柄であった。この時期に八木氏が関西地方へ就職することになり、村田氏より八木氏に滋賀大学漕艇部の指導を直接依頼する形でコーチ招聘に至った。

#### <八木氏の指導体制・方法>

八木氏が行った部活動運営の改革は、以下の3点であった。1つ目は、小艇(ペア)のトレーニング

環境づくり、2つ目は選手選考システムの客観化（コンセプト2エルゴメーターによる漕力測定(以下エルゴという)とペアレース)、3つ目は3年間のトレーニングスケジュールの作成と実行であった。これらの取り組みは、八木氏のトップレベルでの選手経験(1990年～1999年まで)に基づくものであった。また、この時期は、漕艇競技においては用具の進化や大艇中心から小艇中心の練習形態への変化など変革期にあり、その変化に適応できたものだけが一定の成果を収めるという時代でもあった<sup>5)</sup>。本学漕艇部において、選手経験に裏打ちされた八木氏の的確なアドバイスや指導を忠実に守り、いち早く時代の流れを捉え練習形態を柔軟に変化させ、「勝つこと」、一本一本の漕ぎの「質」にこだわる取り組みを導入したことが、2005年にはインカレ男子ペア準優勝など、この時期の優れた競技成績に繋がったものといえる。

八木氏は2019年1月のインタビューの中で「当時の現役部員は勝利を渴望しており、大変指導がし易かった」と述べており、八木氏自身もまた、本

職があるにもかかわらず当初は交通費も自己負担するボランティアコーチであり、毎週末、車で片道3時間半の道のりを駆けつけ、大津市の御殿ヶ浜合宿所に宿泊しながら、超人的なエネルギーで現役学生の指導を続けていた。このような現役学生と指導者の双方向での熱意ある取り組みもまた、この年代の競技成績に繋がったものといえる。

八木氏の指導方法については、1) トップレベルの選手経験に基づいた思考・行動、すなわち、時代背景に即した練習方法を柔軟に取り入れていること、2) 客観的指標に基づく指導方法を導入していること、3) トレーニングメニューを綿密に作成・実行していることであり、これらの取り組みは、第一期黄金期の古川氏の指導方法と極めて類似したものであった。指導内容・取り組みについては、主に、以下の3項目であった。1つ目は、図7に示したように練習方針の明確化と着実な実施である。これは、一年間の練習方針を明確化し、方針を達成するために具体的なメニューを提示し、継続して学生に取り組ませるといったものであった<sup>9)</sup>。例

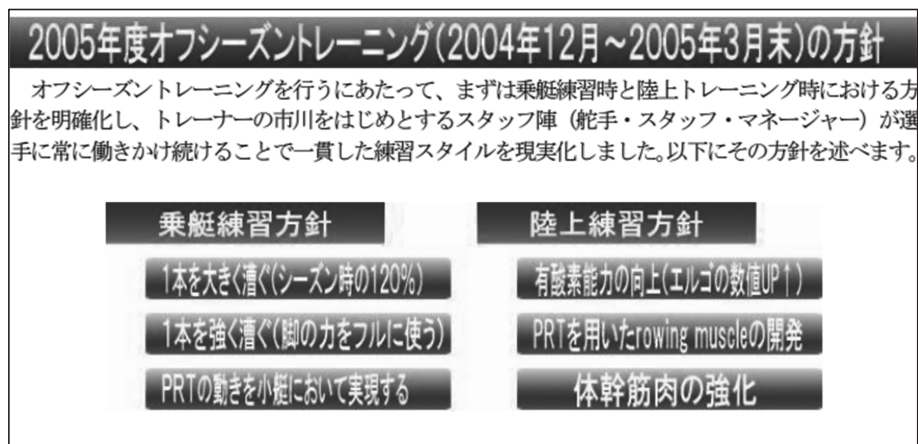


図7 2005年度オフシーズントレーニング(2004年12月～2005年3月末)の方針

えば、エルゴは15～20分×2回を低レート（1分間に22ストローク）の全力漕、8分×2セット（MAXで2000タイムトライアル対応）のいずれかでシンプルかつ質の高いもの、体幹筋肉の強化を重視し、腹筋・背筋を100回×3セットを行い、シーズンを通じて腰痛を発症させない目的で、継続して取り組むなどであった。その他にも、図8に示した独自に考案したPRT（Power Rowing Training：八木氏の指導を咀嚼し、市川氏（54期）が命名）を導入して取り組んだ。このトレーニングは、八木氏が来る以前の学生は練習をがむしやりにやるが、肝心の艇を進める感覚が身についていないので、練習量のわりに戦績に結びつかない状況であったところ、艇を進めるために感覚や筋肉を身につける方法としてPRTが考案された。キャッチから上体を開かず、ぶら下がってドライブすることは言葉では説明できても大学からボートを始めた学生が理解するのは難しいため、図8のイラストを用いて解説した上で、年間を通じて無意識にできるまで指導を続けた。結果、選手が体得できるまでに成長した<sup>9)</sup>。

2つ目は、小艇への取り組みであった。滋賀大学漕艇部自体に組織として勝つことの体験が少なく、継承できていないため、ペアもしくは舵手付きフォアで勝つ経験を積ませること、いわゆる「勝ち癖」をつけることを目的として取り組んだ。小艇は自分で漕いだ結果がダイレクトに表れるため、小艇を通じて自ら考え、感じながら艇を進めることを体得させた。八木氏の指導は、基本的なことを教えた以降は現役に任せる、よほどうまくいかないときにアドバイスするといった指導であった。練習メニューは、平日授業の関係から時間的な制約（当時は大津市御殿ヶ浜で合宿）から多く漕げないが、土日は授業がなく時間的な制約もないことから学生は主体的に気の済むまで乗艇するといったように、

現役自身がボートを追求する姿勢を育んだ。年間を通じてほぼ同じメニューで、レース期には1000m、2000mのコースを異なる艇種でも並べて絶えず競争させる方法をとっていた。

3つ目は、指導者と学生とのコミュニケーションを大切にした取り組みであった。八木氏は「漕艇競技に精通した兄貴分的存在」のような立場で現役と接していた。OBコーチではない立ち位置であったため、一定の距離を保ちながらも、選手とコミュニケーションがしやすかったようである。年2回は飲み会や艇庫前でのバーベキューといった行事も行われた。八木氏側から学生側に絶えず話かけ、学生の思いを聞く一方、八木氏の思いもまた、繰り返し伝える努力を行っていた。

#### <第二期黄金期のまとめ>

八木氏の指導はリギング<sup>\*\*)</sup>他漕艇競技の基礎知識を習得させるべく丁寧な指導をしていたこと、また当時少なかった小艇による指導を主体とし、漕姿スタイルにこだわらず、艇を進めることを体感させ、学生自ら学ばせるスタイルであったといえる。

これらのことから、この年代において、年間競技戦績が再び大きく向上した要因は、古川氏と同様に、外部コーチの八木氏の存在が大きく影響したものと考えられる。

### 3.5 廃部危機脱出期(2007年～2013年)

2007年～2013年の6年間（廃部危機脱出期）は、図1に示したように、部員数が激減した時期である。八木氏が転職に伴い指導が困難となり、2007年以降外部コーチが不在となる中、現役の自主的な部活動運営に任せる時代が続いた。故北居氏(18期)は2020年2月のインタビューの中で「現役学生は歴史と伝統を守ろうとする過度なプレッシャーに苦しみ、部活動の戦績の低迷の原因

<sup>\*\*\*)</sup> リギング：艇やオールの各部分を漕手や水面の状況などに対応して最適な状態に調整すること。



「PRTは2005年度のインカレ前において一応の完成を見ました」と先述しましたが、その内容を少し述べますと、右下図のように、ドライブのイメージを変更しました。八木コーチが来られて以来、滋賀経ではファイナルに向かって1点に力を加える「3点同時」の漕法を採っていました。しかしこの漕法はピッチング

(艇が前後に揺れる)  
やサージング(艇速変動)といった問題点もかかえていました。

そこで新たにイメージされたのが図の右側のような「ミドルに艇を動かすピークをつくる」漕法です。ヒントは世界選手権での漕手

の漕ぎ方がありました。この1つの完成系により、それまで点で捉えていたドライブのピークが線になり、より正確にドライブをまっすぐ引ききることが可能になりました。その結果、艇をより効率よくかつより力強く加速させることが出来るようになりました。PRTは非常に原始的なトレーニングですが、この様な艇の効率的な動かしか方を陸上において体感することが出来る点でも、優れたメニューであると考えています。反面OB通信の写真のとおりこのトレーニングは人間が付加となりますので、互いの意識の高さがそのままトレーニングの質の高さになります。今年度の冬季練習やその後のシーズンでは選手それぞれが甘えることなく、互いを刺激しあいPRTをしてきていました。勝つためには当たり前ではありますが、その当たり前をこれからもより高いレベルで続けられるチームであり続けて欲しい、そのために引退した身で何が出来るか。それが最後の仕事だと思っています。

このPRTでは、①「前からのしっかりと水のかかり(キャッチ剛性)」と②「正しいローイングフォームで使用する筋肉の強化」という2点にポイントが集約されると思います。従来は、このコツともいえるべき感覚を直接乗艇練習の中で掴もうとしていたため、艇上で一定のレベルに達するまでにかなりの期間を要していました。その経緯をふまえ、上記の図のようなドライブのイメージを陸上でしっかりと習得してから乗艇練習に望むことで、「短期間に熟練者の感覚を掴んでしまおう」というのがこのトレーニングの最大の意義です。また、継続的にこのトレーニングを行うことで、PRTでの感覚と乗艇での感覚による相乗効果も狙っています。

## PRTとは

- トルク、パワー、スピード、エルゴ腹筋からなる、ローイング運動を意識して筋肉を発達させるための運動。
- 私立との経験の差を埋める(ローイング筋肉の意識)のために、ローイングに近い高付加運動を行う。



rowing muscleの意識

## PRT各部の動き。Torque



- A = B
- アーチの意識
- 腕のぶら下がり
- エントリー後、艇を動かす
- 負荷MAX
- 大腿四頭筋、脊柱起立筋、後背筋

足の生み出したパワーをブレードに伝える

図8 PRTに関する説明資料



を部内で解決することができず、その結果、部員数も大幅に減少していくことになった」ことを報告している。当時の滋賀大学漕艇部顧問であった吉川氏は2019年7月のインタビューで「当時、事ある毎に学生が研究室に頻繁に訪れ相談を持ち掛けられた。当時の学生個々人の問題意識は高く部員が少人数の時代の方がたくましく育っている印象がある」ことが報告されている。部員数の減少等の厳しい状況下にあいながらも、現役部員も現状を打開するため自ら考えて行動を起こし奔走している様子が窺える。

大学にも大きな変化があった。それまでは授業への出席は学生の自主性に委ねられていたが、授業への出席が義務化された。そのため、部活動、特に漕艇部のように大津市御殿ヶ浜での合宿生活と彦根での授業といった二重生活を送ることは困難となった。また、それまで部の運営資金は部員によるクラブバイトで賄っていたが、クラブバイトが禁止されたため、個人による部費支払いとなったことで金銭面の個人負担が重いこともあり、例年通り新入部員を獲得できても、卒業時には数人しか残らない状況に陥った。部員数減少に伴い、部存続の危機に立たされていたことから、2009年の新入部員勧誘活動から白濱氏(49期)らOBコーチが現役部員とともに部員勧誘に奔走した。特に、白濱氏、白濱夫人(50期)は毎週のように彦根に泊りがけで対応した。その努力の成果として部員数は持ち直すこととなった。

2011年には部員数の激減から漸く抜け出したものの、新3回生が少なかったこともあり、新2回生も部の運営に加わって指導していくこととなった。特に怪我をしにくい身体の使い方や上達の程度に応じた練習量の目安などが共有されていなかったため、練習で身体を痛める部員が多く、怪我をした部員の回復と共に体力を維持する練習に頭を

悩ませていた。また部員数が確保できるまでは、勧誘シーズンにあっては練習より勧誘を優先せざるを得ない面もあった。効果的な練習を試行錯誤する一方で、大量退部を招かないため、時に同好会的な楽しい雰囲気作りにも腐心しながらも、体育会の部活動として勝利するにはどうすればよいか真剣に取り組んでいた時期でもあった。

2013年になると部員数が最も少ない時期を乗り越え練習量も充実し、どうすれば勝てる練習ができるかを常に現役とOBコーチが一緒に考えて進めていた。また対校クルー以外のメンバーの練習について質の向上を課題としていたため、当時の4回生は引退後も学生コーチとして練習に参加してくれた。この間の現役には卒業後も「OBコーチを」との話があったが、就職後の勤務地が遠方となり叶わなかった。この当時のOBコーチもまた、仕事や家庭とのバランスを取りながら指導を継続することの難しさを痛感している。

#### <廃部危機脱出期のまとめ>

八木氏が転職に伴い指導が困難となり、インカレ男子ペア準優勝以後引き継ぐ現役にとって、勝ち続ける伝統を守ることは過度なプレッシャーとなり、戦績の低迷を部内で解決を図ることができない状況に陥っていたことがわかる。その一方で、当時の学生個々人の問題意識は高く、自主的な部活動運営に真摯に向き合っていた。八木氏の後任指導者をタイムリーに選任し、指導体制をうまく引き継ぐことができなかったことはOB会の反省すべき点であったといえる。この年代においては、大学側の変化もあり部員数が激減する中、練習よりも新入生獲得に注力することや、大量退部を招かないための部活動運営が優先された時期となった。OB会側も現役の状況から勝てるレベルにほど遠く外部コーチを雇う状況にないと判断し、監

督・OB主体で指導にあたることになったが、OB会の支援のもと白濱氏ら当時のOBコーチや現役の奮闘により、部員数を持ち直すこととなり、なんとか廃部を免れた時期であったといえる。

### 3.6 再構築期(2014年～2019年)

2014年～2019年の6年間(再構築期)は、本学漕艇部では3人目の外部コーチとなる野村雅彦氏(現 NTT東日本所属；日本大学ボート部出身、元日本代表)を招聘した時期と重なっている。この間の主な競技戦績は、2015年には全日本新人戦男子舵手付きフォアで4位入賞、2019年には男子舵手付きフォアで朝日レガッタ決勝進出、関西選手権では3位入賞などの好成績を挙げた。しかしながら、経験者が複数名いるなど、この間の戦力は比較的高かったにもかかわらず、当初目標としていた「3年以内に関西選手権男子エイト優勝」は達成できず、男子舵手付きフォアの決勝進出に留まった。

#### <野村氏招聘の経緯>

野村氏はソウルオリンピックエイト日本代表選手としての優れた競技実績があり、また、当時、一橋大学漕艇部のコーチとして、指導実績を上げていた。低迷していた滋賀大学漕艇部の復活のため、当時の陵水艇友会副会長であった北居氏は、シニアボートクラブ(団塊号)の仲間から野村氏招聘の可能性があるとの情報を得た。そして、北居氏は2020年2月のインタビューの中で「故古川コーチ時代では、学生が勝ちたいと思っていくら練習しても勝てないところ、その救済のために古川氏を招聘した。しかし、今回は、漕技はもちろんだが、精神面の立て直しを図ることが急務の課題であり、そのために野村氏を招聘した」ことを述べている。すなわち、この年代では、技術・体力の強化

を図る以前に、勝ちに貪欲な組織への改革を目的とすることで、低迷期からなんとか脱却することを目指していた。また、北居氏は、野村氏を招聘したことについて、「地方大学の1学部だけの漕艇部でも、高い目標と厳しい練習と強い意志を持てば、全国でも勝てる」という伝統的な部の信念を想起し、古豪復活への挑戦でもあったことを報告している<sup>5)</sup>。

#### <野村氏の指導体制・方法>

野村氏は、月1回、東京から大津市御殿ヶ浜・彦根に通う方式で、2017年までOBコーチ8名がサポートする指導体制をとった。野村氏は、2014年頃に日本中を席捲した重心を低くし脚ドライブを重視した漕法(仮に『低重心漕法』と呼ぶ)を学生に指導した。重心ポジションを低くし、フィニッシュは踵で押し込む、ハンザウエイを兎に角速く、キャッチはねじ込む感じで、ストレッチャー(足シューズ)を高い位置にし、水平な漕ぎを求めた。しかしながら、野村氏の漕技の指導法は、氏自身の持つイメージ・感覚や経験に基づく指導が多かったため、学生たちはそれらを見聞きしながら、あるいは試行錯誤しながら、そのイメージ・感覚を体得・習得することになった。また、粕谷吉紀(東京経済大OB)氏をマネージングコーチとして迎え、フィジカルテストや身体の使い方の基礎講座を導入するなど、当時から最先端かつ強豪クルーの実績あるメニューが学生たちに提供されていた。しかしながら、実績あるメニューがあっても、実施自体は現役学生に委ねられていたため、次第に練習の質は低下し、十分なフィジカル強化に至らなかった。

学生の精神面への強化について、野村氏は、当時の北居氏の「漕ぎ方もさることながら、勝ちに貪欲な組織に変えてほしい」という課題に対して、指

導初年度に熱気を帯びた指導を実施した。このことについて、三嶋氏(48期)は「学生達や自分の知らない新しい練習や身体の使い方を教えると同時に、自分達に足りない部分を大いに自覚させてくれたこと、一橋大学にできて、滋賀大学にできないことは何もないこと、スタートラインは常に同じ、後はどれだけやるかの覚悟が必要であることなどを学生に強く呼びかけ、自分達が勝てない原因はどこにあり、何が足りないのかを考えるきっかけを与えてくれた」ことを報告している。また、野村氏の指導を受けた学生らは、図9に示したように、勝負事に対して様々な気づきを得ていたことが理解できる。このように、野村氏は、北居氏の当初の狙い通り、学生のやる気を喚起し、上述のような好成績に繋がったものといえる。

その一方で、この当時、彦根キャンパスの学生の練習環境に対する問題が生じていた。彦根キャンパスの学生は、野村氏に指導を受けるまでは、毎日、彦根から大津市の御殿ヶ浜合宿所へ片道約1時間を電車で移動しながら練習に通っており、従来から、移動に伴う時間的・物理的・金銭的な問題が生じていた。また、瀬田川流域は流れがあるため、練習環境としては望ましくないことや、野

村氏の指導面でのロス排除(指導するクルーが対校レベルに限られ、毎年、同じ指導が繰り返されることで、指導ベースの積み上げができないこと)など、様々な負の要素が重なっていた。この当時の彦根キャンパスでは2017年度にデータサイエンス学部が新設され、授業体制も大きく変化した。それゆえ、これを機に、2018年秋より練習拠点を彦根に集約し、学業と部活動が両立できる落ち着いた環境を整え、練習に励むこととなった。秋口からシーズンを通し、毎月1回、彦根に2泊しながら当時の井上監督(29期)と野村氏の二人三脚による学生指導が、定期的に実施された。現役に勝利への執念を植え付けるべく生活指導を含む熱血指導が続き、現役にようやく戦う雰囲気が醸成された。

しかしながら、練習環境が整っても、当初目標としていた「三年間で関西選手権男子エイト優勝」は達成することはできなかった。現役の精神面は少しずつ改善されたが、月1回の指導ではブレイクスルーするまでに至らなかった。また、当初、OBコーチ8名でスタートした指導体制も転勤などにより次第に脆弱となり、最終年のOBスタッフは井上監督のみとなった。野村氏もまたOBコーチの補

1. 徹底した体づくりで故障しない身体、レースで勝てる身体をつくるのが大事と分かった。
2. 一橋大学も未経験者ばかりなのは、自分達と同じなのだと分かった。
3. 運動してこなかった自分たちでも日本一を目指せるのだとやる気がわいた。
4. 勝つためには、技術・体力も必要だが、「勝つ」という強い意志が大切だと分かった。
5. 強くなるためには部内競争が必要で、結果としての犠牲も必要だと思った。
6. 練習の中身が違い過ぎて驚いた。
7. 練習に対する覚悟が変わった。

図9 野村氏の講演会を聴いた直後の学生の感想

充を要望していたが適任者を補充しきれなかった。このことについて、野村氏は2020年9月のインタビューの中で「月一回の指導でも間の指導でOBコーチの支援があれば、十分に自分の指導を徹底できた」ことを述べている。

#### ＜再構築期のまとめ＞

この年代においては、野村氏の指導に加え、戦力が比較的高かったこともあり、前年代の低迷期を抜け出し、一定の好成績を残すことができた。しかしながら、当初目標としていた「3年以内に関西選手権男子エイト優勝」は達成できなかった。その要因は以下の通りである。

野村氏の漕技の指導法は、古川氏や八木氏とは異なり、氏自身の持つイメージ・感覚や経験に基づく指導が多かったため、現役たちはそれらを見聞きしながら、あるいは試行錯誤しながら、そのイメージ・感覚を体得・習得するといったものであった。また、野村氏の指導対象は、対校クルーが中心であったため、毎年入れ替わる学生への指導が徹底できなかった。現役の精神面の指導においては、「朝日レガッタ優勝も良いが、インカレ優勝という高い目標を持って取り組まなければいけない、やればできる」などの勝ちにこだわる精神を徹底的に叩き込むといった熱意ある取り組みがなされた。その結果、現役の精神面も少しずつ良い方向へと変化し、加えて、練習環境も改善されたが、月1回の指導では現役がその熱意に反応し、自分たちにもできるといった確信に変わるまでには至らなかった。さらに、フィジカル指導において実績あるメニューが提供されても、実施自体は現役学生に委ねられていたため、次第に練習の質は低下し、十分なフィジカル強化に至らなかった。加えて、野村氏の指導体制・方法の特殊性からOBコーチのサポートは必須であったが、次第にその

指導体制が脆弱となってしまったことも要因の1つとなっている。

野村氏に指導を依頼することで、一橋大学漕艇部との交流(男女クルーが戸田で合同練習、スタッフが一橋大学漕艇部の戸田合宿所に入り、スタッフの役割他を学ぶ、オックスフォード盾レガッタに一橋クルーのコックスとしてレースを経験)を持つことができたこと、勝つ集団とはどのようなものかを体感できたこと、練習拠点を彦根に移したことで現役の様々な側面でのゆとりを得ることができるようになったことや滋賀大学漕艇部のアイデンティティを再認識できたことなど、現役の成長に多くのプラスの影響をもたらしたものといえる。その結果として、この年代において、低迷期から脱却し、一定の好成績を得ることができたものといえる。

しかしながら、一流コーチに現役の指導を依頼するだけでは現役学生が強くなるとは限らず、OBコーチをはじめとするOB会が、現場を取り巻く環境に対して、確固たる指導体制を整え、継続的に支援することが重要といえよう。

## V | まとめ

本論では、滋賀大学漕艇部の過去41年間を振り返って、競技実績を有していた時期と低迷していた時期の部活動運営のあり方や指導体制・方法などについて比較検討し、滋賀大学漕艇部が関西屈指の強豪校に復活するための今後の目指すべき方向性と課題について明らかにすることを目的とした。以下のような結果が得られた。

### 1. OB会の指導体制のモニタリングと支援の継続

外部コーチ・OBコーチの如何にかかわらず、その指導体制が一旦途絶え、現役のみの自主的な



部活動運営に切り替わる年代では、外部コーチによる漕艇競技の専門的知識の提供が途絶えるのみならず、客観的で身近な相談相手が不在となると、次第に戦績が落ち込む結果となることが明らかとなった。また、現役自身は戦績が振るわない原因をボートに対する取り組み姿勢などの精神面に求める傾向があり、部内で原因を解決できない状況に陥っていることも明らかとなった。OB会としては、指導体制を常にモニタリングし、よりよい支援を継続することが重要である。

## 2. 外部コーチによる適切な指導の維持管理

現役が勝利に向けて練習に打ち込む前提には、現実的に実力が一定以上の水準を確保できる体制が必須となる。

図10は、1978年～2020年までのインカレ男子エイトクルーのベストタイムの推移である。男子エイトは2000mで6分を切れたら一流と言われた時代から、今やトップクルーは5分45秒前後と15

秒程度短縮されている。道具の変化や指導方法の向上、選手各人の体力向上他によるところが大きいといえる。日進月歩の漕艇競技界にあって、OBコーチの過去の経験や現役だけで他大学に太刀打ちすることはもはや困難である。上述で述べた通り、故古川氏、八木氏、野村氏の各年代において、競技成績が著しく向上したことは紛れもない事実である。最先端の情報を把握し現役に腹落して伝えるスキルを持つOBコーチを育成することは、現状では極めて困難と言わざるを得ない。学生が安定した競技成績を得られるようにするためにも、OB会として継続して外部コーチを招聘し、定期的成果の見極めをしながら、指導体制を維持管理していくことが必須といえよう。

## 3. 現役の自主性を尊重し現役自身が勝利を渴望する伝統の継承

現役の自主性を尊重した部活動運営は滋賀大学漕艇部の伝統である。現役の自主性を尊重しな

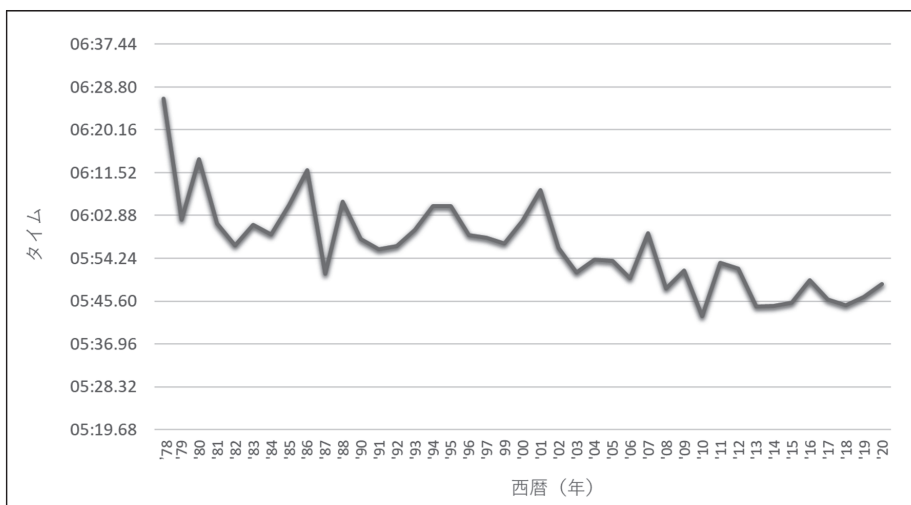


図10 インカレエイトクルーのベストタイムの推移 (1978年～2020年)



ければ、勝利がおぼつかないことは古川氏の指導3年目以降の指導方針変更でも明らかである。現役自らが自問自答しながら勝利を渴望し、試行錯誤しながらその可能性にかけて限界まで一心不乱にボートに打ち込む姿勢、これこそが滋賀大学漕艇部の伝統である。

古川氏は、純粹無垢で真摯にボートに打ち込む現役の姿勢に魅せられた。古川夫人は、2020年10月のインタビューの中で、「生前、彦根へ指導に行く前日の金曜日はウキウキした様子であった」ことを報告している。八木氏もまた、本学漕艇部の勝つことへの情熱やひたむきな姿勢に魅せられたことを回顧している。北居氏の指摘の通り、現役自身に「勝ちたい」という明確な意思表示と一心不乱の精進がなければ、いくら優秀な外部コーチを招聘しても戦績を上げることはできない。部員数激減の打開策として時に同好会的な雰囲気作りはやむを得ないことであったが、新入部員を勧誘

する際には、現役自身、滋賀大学漕艇部が日本一を目指しているクラブであることをしっかりと伝えてくれており、廃部危機脱出期を経てもその伝統は守られている。

図11は、創部95周年事業実行委員会によるアンケート調査結果を示したものである。これを見ると、OB会会員へのアンケートでも現役の自主性を尊重し、現役が勝利を目指すことに對し支援する意見は多数寄せられていることが理解できよう。OB会は、今後においても慰労会などを通じ、現役が勝利を目指すことを支援していることを伝える努力を継続して行くことが必須といえる。

## VI 今後の取り組みに向けて

これまでの部活動運営のあり方や指導体制・方法を振り返り、反省点を生かすべく2019年からOBコーチ4名、外部コーチの杉藤洋志氏(元軽量

### IV 全体総括

- ・名簿整備を行って実施に臨んだが、回答率32.9%に終わったことは、忙しい年代の関心を集めることの難しさをあらためて感じる結果であるとともに、提案内容、表現方法にも改善すべき点があったと反省。ただ、179名の回答、106名の意見が寄せられたことは大いに意義があり、ある程度全体の意見の傾向として読み取るには足る回答数であると考えています。ただ、回答状況は、回答別にも偏りがあることも踏まえ、引き続き意見集約に努めて行く必要性を認識しています。

- ・寄せられた意見を整理すると主に次の3点に括ることが出来ると分析しています。

#### 「勝利を目指す」

現役が勝利を真剣に目指すことが肝要であり、それを支援するとの意見は全体を通して寄せられた。

#### 「現役との適度な間合い」

「現役の自主性」を尊重すべきという意見は若手だけでなく年代別各層に広範に、多数見られた。その一方、強化のためには指導力、継続性等の重要性を指摘する意見も多かった。

#### 「長期的な課題への継続的な取組」

各提案項目の検討の方向性には賛同が得られたが、指導体制、彦根拠点、艇庫問題、組織、ビジョンいずれもその中身次第との指摘が多く、中身についての意見も様々あった。特に艇庫・合宿所、組織に関しては論点整理と慎重かつ継続的な検討と取り組みを望む声が多く見られた。

図11 創部95周年事業実行委員会によるアンケート調査結果

級ダブルスカル他日本代表、元日本代表コーチ)による指導体制がスタートし5年目になる。この間、2021年インカレ女子ペアで3位入賞、2022年関西選手権男子舵手付きフォア優勝、2023年朝日レガッタ女子シングルスカル優勝と戦績は上向いている。一方で過去において繰り返された課題を克服するには至っておらず、試行錯誤が続いている。下記施策を念頭にOB会として現役の支援に鋭意努力して行きたい。

## 1. 現役にストレスを与えない支援の継続

スポーツ界においてストレスフリーとすることで選手の能力を伸ばすイノベーションが広がりつつある<sup>10)</sup>。従来の体育会系の上下関係から抜け出し、上級生が雑用を担うなど、下級生にストレスを与えないことにより、下級生が伸び伸び練習し能力を高めることで戦績を上げている。現役の運営のみならず、現役とOB会の関係においても、OB会は現役に精神的なストレスを与えることのないよう支援に徹し、必要な環境の整備に取り組むこととしたい。また、自主性の名のもとに放任するのではなく、社会に出て役立つルールなどは最低限教育しながら、期初に現役幹部とOB会が共有した課題について、毎年その達成レベルを見極めPDCAを回しながら必要な支援を継続して行くこととしたい。

## 2. 指導体制の再構築

2019年から現役に寄り添う指導を目指し、OBコーチが月一回から二回程度彦根で現役指導に当たってくれたことで、現役の心理的安全性は確保され部活動そのものの雰囲気は明るくなった。一方、これまで通りにOBコーチが費やす労力を考慮して選任すれば、その担い手も滋賀県近郊在住者に限られてしまう。OBコーチに過度の負担がか

からないよう継続してゆくため、任期を一期3年、最長でも二期を限度とし、絶えず若いOBの参画を促したい。また、現役の心理的安全性を確保できる最小限の指導頻度を探りながら、現役とOB会のつなぎ役を担う人材を選任していくこととしたい。漕艇技術の専門家としてOBコーチを育成することはハードルが高いものの、これまでのコーチング動画や練習データを分析するアナリストであれば、リモート会議でも対応は可能である。遠隔地在住の有志をOBコーチのアナリスト担当とし、現役スタッフをサポートしながら共に漕艇競技に関するノウハウの蓄積を担って貰いたい。

## 3. スポーツデータサイエンスを切り口とした育成強化

これまでも本学体育教官と連携し育成強化にあたってきたが、データサイエンスを切り口とした研究成果を論文化するに至っていない。漕艇競技向上・部活動運営等が現役の卒論のテーマの一つとして研究成果となるよう更なる連携強化をしたい。ひいては本学のスポーツデータサイエンス分野での業績向上の一助となることを期待したい。

本論を通じてOB会として現役指導にあたるOBコーチ及び現役に伝えたいことは以下のとおりである。戦績を上げることが目標とする意義は、日本国内の学業・漕艇界でのエリート校と同等のレベルの戦績を収めることである。そして、たとえ目標とされていた戦績を収められなくても、レースで競い合い、相手にも記憶に残るような体験を一人でも多くの現役に積んでもらいたい。その経験を通じて滋賀大学漕艇部への愛と誇りを抱きながら社会に送り出す。そのために今後も滋賀大学漕艇部が「関西の強豪」であり続ける努力を支援していきたい。

## 【付記】

本論文執筆にあたり、多くのOB・OG方々には、お忙しい中快くインタビューの時間を設けていただいた。紙面をお借りして深謝申し上げます。

### 参考文献

- 1) 岡本進・寄本明・佐藤尚武・宮本孝・武部吉秀・古川宗寿・清水啓司・玄田公子・吉田瑞穂(1984)「ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究(1) クルー別にみた体力特性」、滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、4: 59-72
- 2) 岡本進・寄本明・玄田公子・吉田瑞穂・宮本孝・佐藤尚武・武部吉秀・古川宗寿・清水啓司・宇部一(1984)「ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究(2) トレーニングに伴う1年間の体力推移」。滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、5: 94-102
- 3) 陵水艇友会編(2009)『偲湖』陵水艇友会85年誌。
- 4) 陵水艇友会編(2014)『偲湖』陵水艇友会90年誌。
- 5) 陵水艇友会編(2019)『偲湖』陵水艇友会95年誌。
- 6) 『月刊漕艇』。全日本大学選手権結果1978-1998
- 7) 『月刊ローイング』。全日本大学選手権結果1999
- 8) 日本ローイング協会ホームページ。大会情報 全日本大学選手権結果 2000-2018(2020年9月21日閲覧)  
<https://www.jara.or.jp/race/2000~/2018>
- 9) 『偲湖』第5回(2006)滋賀大学漕艇部誌
- 10) 日本経済新聞(2021/6/5付け夕刊)〈SPORTSデモクラシー〉ストレスフリーは伸びる

## **Efforts to Reconstruct the Shiga University Rowing Club into One of the Most Competitive in the Kansai Region:**

### **Analysis of Past Coaching System and Future Issues**

Shunsuke Ogata  
Yoshiteru Hyodo  
Shigekazu Tsujioka  
Koichi Motoya  
Yohei Mishima  
Nobukatsu Takemura  
Shizuka Michikami

The Shiga University Rowing Club celebrated its 100th anniversary in 2023. The club had a brilliant competitive record from its early days to the prewar and postwar periods, and was once one of the strongest collegiate rowing clubs in the Kansai region. After that, the club fell into the danger of disbandment due to problems with the coaching system and a decrease in club membership. In recent years, however, the club's competitive record has been improving, although it has not reached the competitive level of the past.

The purpose of this study was to review in detail the management of the Shiga University Rowing Club and its coaching system and coaching methods, including external coaches, over the period of 41 years from 1978 to 2019, and to compare the periods when the club's competitive record was excellent and low. The study also clarified the future issues and direction of the coaching system and coaching methods as well as of the support activities of the "Ryosui Rowing Association," the alumni association of the Shiga University Rowing Club, which will be necessary for reconstructing the Shiga University Rowing Club into one of the most competitive collegiate rowing clubs in the Kansai region.